

元号替わりの騒々しい日々からひと月が過ぎた。平成の最後の日も令和の最初の日も高知は篠つく雨だった。

ちなみに「令」は命令の令ではなくて、令嬢、令夫人、といった「麗しき令」と説明されたいが、この令和の時代（いやいや、平成の時代も）、令嬢や令夫人という言葉などだけが使うというのだろうか。もしかしたらいまの若い人たちはそれらの言葉さえ知らないかもしれない。まあ、元号はあってもなくてもどっちでもいいものだろうから、そんなにこだわることもないのかも。

何年前か、天皇が「天皇」をやめたいといったとき、おもしろい話で、天皇制をやめたい、といってもよかったのに、なんておもしろい話があったが、まあ、そんな詮無いことをおもしろいはほんのひと握りだろう。

というのは、ほとんどの人が天皇制を肯定的にみているらしいのだ。新聞やTVのニュース番組を熱心に読んだり見たりしていないからまちがっているかもしれないが。

それというのも、内田樹がブログで、天皇は象徴天皇としての役目として鎮魂と慰藉の旅を繰り返しているから支持する、というようなことを書いていて、ほおおお、とおもったことがあったからだ。内田樹はいちおうリベラルな人だとおもっていたが（かつてにおもっているだけのことだが）、その内田樹も象徴天皇としての在り方、行動については賛同し、天皇制を「あつてもいい」といつている発言だったので、ほおおお、とおもわず声が出たのだ。リベラルな人が天皇制を支持してはいけない、とはおもしろくないが、なんとなく、ほおおお、とおもつ

なく納得させられてしまったことがあった。  
——シンボル、神話、イメージが精神生活に必須な資であること、われわれはそれらを偽装し、ずたずたに切断し、その価値を下落させることはできても、根絶やしにすることはけつしてできない——

秋川久紫さんから『フラグメント 奇貨から群夢まで』（港の人）をいただいた。前集の『昭和歌謡全集』（ツイッソリユーション）に引きつづき、秋川さんの独自性がうかがわれる一冊で愉しかった。

同一の形式の作品（五部構成の断片の内側に、位相の異なる四部構成の断片を折り込む手法—あとがきより）が23篇で構成されていて、造りもこつていて、A5判縦長変形、ハードカバー箱入り、と秋川さんなりの美学で姿形を整えていて、中身も経済、会計、IT用語や漢語、古語、想像上の怪獣名などが満載で、詩という既視感からはズレていこう、秋川さんふうに言えば「獣道しかない山野に割って入るが如き心持ち」で書かれたものだろう。

集中から比較的読みやすく、秋川さんのテーマが率直に出ている『ペリーソーターと歌舞音楽を巡るエスキス』全篇。なお「エスキス」とは、スケッチ、彫刻の粗削り、草稿、の意。

### 《ペリーソーター—其の志》

赤や紫に色付く果実のコンポート。今すぐ歌麈の牢に持つ

たのだ。まあ彼はどちらかという倫理的、道徳的なことに重きをおく人なので、天皇制肯定という発言もなんとなく納得したことがあった。

前天皇は災害がおれば被災地へ出かけ、膝をついて被災者を励ますという、ユングのいうグレートマザー的な在り方で、日本人々に受け入れられていたのだろう。そういう意味では内田樹的な容認者は多いだろう。

天皇一家がどのようなアイデンティティをよりどころにしているのか、などは推しはかることなどとうていできないが、北一輝は、天皇が一国民として一般の国民と共に国家のために行動する公民国家を主張したが、もう一歩前にすすんで、天皇一家は肩書きを外して生きていきたいとおもったことなどないだろうか、とよけいなお世話的なことをおもしろくしてみよう。そうできたなら、天皇の孫娘、いまでは姪っ子の立場だが、彼女も好きな人と結婚できるだろうに。母親の金銭トラブルがネックらしいが、普通の家庭ならそんなトラブルのひとつやふたつはかならずあつて、それら乗り越えたり、のらりくらりとやりすごしていくのも「夫婦」だとおもしろいのだが、天皇の姪っ子は「新しい家庭のトラブル」を乗り越える楽しみや、のらりくらの醍醐味を味わうことをあらかじめ奪われている。

象徴天皇というのがぼくにはよくわからないのだが（わかるうとしていないのだが）、象徴とはシンボルというほどの意味だろうか。宗教学者ミルチャ・エリアーデはその著書『イメージとシンボル』（せりか書房）のなかで次のようなことをいついて、連綿とつづいている日本の天皇制をかさねると、なんと

ていつてやろうぜ。

### 【巧言—歌】

詩人なんて、一番信用出来ない人種よね。信じてもないもののために言葉を紡ぐのよ。さらには、愛してもいないものために情熱を開花させるんだわ。

### 《ペリーソーター—其の志》

炭酸水につけこんだメロンを頬張っていると、滅多に感情を見せない君が、僕の口の中で暴れているような気持ちになるんだ。そして、ようやく表に出て来ることが叶った君の思いを、もし僕がうまくクエン酸と重曹に分解することが出来たら、世界はもっと平らかになるのに。

### 【令色—舞】

アノ時、アナタガミセタ一瞬ノ視線ノ矢ニ射抜カレテカラ、ワタシハ舞踏ノウチニ壮絶ナ戦イヲミルヨウニナリマシタ。アナタヲ強クリスベクトシナガラ。

### 《ペリーソーター—其の参》

読了したばかりの「檸檬」から絞った果汁にアサイージュースを混ぜ、そこにh o n t oで取り寄せた一粒のワランボワーズを添えてみたら、どんな気話まりな観念だつて、やがて正体を無くして蕩け出すだろう。

## 【默契―音】

他者を意のままにしようとして生じる歪みに苦しむなら、彼方の小川のせせらぎに耳を傾け、森羅万象を愛でて、ただ創造のための默契に殉じた方がいい。

## 《ベリーソーダー―其の肆》

レッドカランソつたら、酸っぱさを前面に押し出して抜け駆けしたのよ。ブラックカランソやブラックベリーが律儀に甘みを蓄えているうちに。せめて、気弱なワイルドストロベリーくらいは慎み深さを身に付けたらどうなのかしら。

## 【秘巨】

僕らは失態を繰り返しながら、喝采の裏に潜む小さな異和や痛罵の奥に佇む無音の拍手を聞き分けるために、たくさん戯曲を書いていくしかないんだよ。

## 《ベリーソーダー―其の伍》

六曲屏風の右から二扇目、棚引く霞の切れ目から覗く楊梅の赫い実。この金地の一雫を宗達がくれた時、俺は何だか無性に喉が渴いてしまったものだから、たくさんの女たちが奏でる翳りと哀しみを道連れにして、水中に遊ぶ気泡の如き《桃山》という時代の全てを飲み干してみようか、なんて考えていたのだ。

たとえばここには、果物をメインとした飲み物を語りながら、自我と他者のせめぎ合いは常に自我の敗北であろう、というかすかな落胆と、その感情にあらがうように、言葉で構築しようとする頑強さがゆいいつ自分の一助になりうるだろうという秋川さんなりのスタンスが示されているのだが、これらの断片（フラグメント）は細部の構築には役立つかもしれないが、自我のトータルを見わたすという点においては役割を十分に発揮していない、そんな読後感だった。

もっとも、トータルとしての自我、などという幻想に近い発想はどこからでてるのか、と反論されれば、返す言葉もないのだが、ぼくたちは、たとえ断片だらけであろうと、それらを統一して、まとまりのある自我の獲得を（絶望的なおもいとともにであつても）願っているのだ、とぼくはおもっている。

加藤典洋が亡くなった。ぼくと同い歳なのに。

バルトやデリダの「作者の死」や「テキスト論」の限界を認めし、丁寧な論考でテキスト論・ポストモダン論に批判を加えた『テキストから遠く離れて』（講談社）が一番おもしろかったが、『太宰と井伏 ふたつの戦後』講談社）も印象に残る一冊だった。帯にこうある。「のうのうと生きる人の場所から、思いつめ、死んだ人のことを考えたい。」

ぼくも「のうのうと生き」てきたひとりだ。